異世界で四神と結婚しろと言われました

浅葱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異世界で四神と結婚しろと言われました

【Ｎコード】
Ｎ４７８６ＢＡ

【作者名】
浅葱

【あらすじ】
中国留学を終えて帰国する飛行機に乗っていたはずが、気がついたら見知らぬところにいました。迎えが来たので着いていったら辿りついたのは王城でした。そこでいきなり国を守護する四神と結婚しろと言われて！？　※見切り発車ですので更新は不定期になります。主人公至上主義です。すごく趣味に走った話ですのでいろんな意味でマニアックです（汗

1．ここはどこでしょう（前書き）

※初めに

主人公が留学生活を終えたのは２００１年です。主人公が語る中国はそれまでの中国のことです。

見切り発車なので更新は不定期です。必ず完結はさせますがいつになるかはわかりません。

作者は中国好きです。中国が嫌いだという人は決して読まないでください。

今回は逆ハーレム展開です。複数の男性と恋愛をする形になります。そういうのを受付けない方も読まないようお願いします。

『』内の言葉は主に中国語です。

1．ここはどこでしょう

始まる前は気が遠くなるほど長い時間に思えた留学生活を終え、香子（こうこ）は今機上の人だった。

北京から東京国際空港まで直通であれば４時間程度のフライトだが、この機は上海を経由する為もう少し時間がかかる。

隣の席の友人は帰国が嬉しくて仕方がないようだったが、香子は切なくてたまらなかった。

香子には彼がいた。中国人で、お茶葉屋の店員だった。まだ見習いで３年の間給料は毎月５００元（日本円で約７５００円）しかもらえないと苦笑していた。だけど彼はできるだけ香子にお金を使わせないようにしてくれた。

レストランでいくらこちらが出すと言っても彼は決して香子にお金を払わせなかった。お金がない時は彼の家に連れて行かれ、彼が夕飯を作ってくれた。お互いの別れを知っていて、それでも最後まで優しかった彼を香子は忘れないだろうと思う。

香子は現実的な自分がひどく嫌だった。一時的に付き合っても、結婚はしないだろうと割り切っていた。

でも今はまだ彼のことが好きだった。

『アテンションプリーズ、これから先気流の乱れがあるところに入ります。座席に戻りしっかりとシートベルトをお締めください』

中国語のアナウンスが流れて、香子ははっとした。

急いでシートベルトを確認する。

しばらくもしないうちに機体が大きく揺れた。香子はたまたま手に持っていたバッグをぎゅっと抱きしめた。

意識があったのはそこまでだった。

なんだか寝心地が悪くて、香子は目ざめた。

（あれ？　私飛行機に乗ってたんじゃ？）

視界に広がるのは青い空に白い雲。どうも仰向けに寝転がっているらしい。視線を横にずらすと、青々とした木々が見える。
（地面に寝転がってる？　飛行機もしかして落ちた？）
そおっと体を起こしたが寝心地が悪いと思った背中やお尻以外は別段痛みもない。そして意識がなくなる前に抱きしめたバッグもおなかの上に乗っていた。
とりあえずバッグを開け中身を確認する。財布が2つ、パスポート、ハンカチ、ティッシュ、飴がいくつか、中日辞典、家の鍵、中国語の本、ポケットアルバム。……なくなったものはなさそうである。
改めて周りを見回すが人っ子一人いない。
飛行機が落ちたと考えても奇妙な話だと香子は思う。
香子が寝転がっていたのは青々とした草の上で、なんとなく森の中でも少し開けたような場所だった。そしてすぐ側に白い石を積み上げたような、昔は建物だった名残のようなものがある。
（なにかの遺跡とか？）
香子は万里の長城が好きだった。遺跡とかそういったものを見るとときめいてしまう変わり者だ。おかげでこんなおかしな状態でも好奇心を刺激されたらしく、バッグを抱え直して立ち上がった。
そして元建造物の側に寄り、まじまじと観察しはじめた。
考古学を学んでいるわけではないのでわからないが、遺跡だと言われればそうなのかと思うぐらいの風格がある。
そうして香子は好奇心に突き動かされるままにちょうど手の高さにある岩にそっと触れた。

ぐらり

世界が激しく揺れた気がした。
「……っっっっ！？」
あまりの驚きに香子は悲鳴を上げることもできなかった。

なのに。
一瞬後には世界は何事もなかったように平常を取り戻した。
「……？」
香子は眉をしかめた。手は依然岩に触れたままである。もしかして貧血でも起こしたのかと思うほど周りに変化はなかった。
実際あれほど揺れたとしたら周りの木々が平常通りであるはずがない。葉や枝が風になびいてはいるが地震による揺れではないことがわかる。
「……なんだっていうの？」
思わず呟いた声は少しかすれていた。
（貧血かな……）
だとしたらしばらく安静が必要かもしれない。香子はずるずるとその場に座り込んだ。そして建造物の名残に寄りかかる。
そしてふと、夢かもしれないと思った。
なんともリアルな夢だとも思う。
そのままぼーっとしていると、風の音や鳥が鳴いているようなチチチ……という音が聞こえてきた。
「のどかだなぁ……」
中国でものんびり暮らしていたと香子は思う。しかも最後の頃は1人部屋だったし、こんな俗世を離れた状態に身を置きたいなんて思うほど疲れてはいなかった。
「あー、お母さんの作ったひじきが食べたいなぁ……」
その前に看板が見たい。香子は日本独自の、カタカナやひらがなの混じったビルやお店の看板を見ると帰国したという実感が湧く。
そうしているとなんだか遠くから人が話しているような声が聞こえてきた。
「……！？」
香子は身を縮め、耳をすませた。
『……○×△か！？』
『……××○□……』

足音はけっこうな数のように思える。そして話声も大きいし何人もいるかもしれない。
（何を言ってるんだろう……？）
聞いたことがあるような、ないような音は風等に紛れてうまく聞き取れない。そうしているうちに足音がだんだん近づいて来、香子はどうしたらいいものかと焦った。
どう聞いても男性の声ばかりで敵か味方かもわからない。けれどどこに隠れたらいいのかもわからず、とりあえず見つからないように身を縮めることしかできなかった。
（最悪な事態だけは勘弁してほしい……）
実は野盗の集団でした、とか。そこまで考えて香子は青ざめた。
（なんでもっと早く逃げ出さなかったんだ私ーー！？）
いくら中国で４年過ごしたとはいってもやはり日本人ののほほん体質は抜けきらなかったのかもしれない。
そんなことをつらつらと考えている間に足音はどんどん近付いて来、
『……○×！』
『……△！　××！？』
何日も洗ってない体のような匂いがした。
香子はあっさり見つかってしまった。

2．やっぱりここはどこでしょう（前書き）

『』内の言葉は中国語です。

2．やっぱりここはどこでしょう

男の1人が乱暴に香子の顔を上げさせる。
『○×……。△○×△△か？』
香子はパニックになりながらも男たちが話す言葉に既視感を覚えた。
男たちは昔の農民のような格好をしていた。中国や日本の時代劇で見るような粗末な布で作られた服を着ている。
男たちはいぶかしげな顔をしていたがどうも敵意を持っているようではなかった。話している言葉は明らかに日本語ではない。
（とりあえず聞いてみるしか……）
『すいません、ここはどこですか？』
普通こういう場面では英語が出てくるのだろうが、香子にとって外国語というのはまず中国語が出てくる。すると男たちが目を見張った。
『×○！　△○△××△○だ！』
なんだか知らないがひどく興奮しているらしい。男の一人が香子の手を取って立たせた。
そしてゆっくりとしゃべる。
『アンタ、オラの言ってること、わかるか？』
なまりはひどかったが、それは明らかに中国語だった。
『はい、わかります！』
そう答えると男は明らかにほっとしたような顔をした。そして仲間たちに身振り手振りを交えてなにやら説明していた。
（あれは方言だな……）
香子はいくら耳を澄ましても聞きとれない言葉にそう判断した。
香子は北京で中国語を勉強していた為、基本は標準語を習っていた。一応4年暮らしていた為それに北京の方言やなまりは少し入っているが、その発音は標準である。

しかし中国は広い。暮らしている間にいろいろ旅行をしたが、標準語を全く解さない人にも会ったし、やはりその土地の言葉で話されると全くわからなかったりといろいろだった。
かろうじて標準語をしゃべれる人がいたのは僥倖だったのか。
そうしているうちになにやら話がついたのか、男たちに手招きされた。
『歩けるか？』
『はい』
気づかうような言葉に頷く。
『じゃあ、行くべ』
促されてバッグを抱え歩きだす。荷物を持つようなそぶりをされたがそれには首を振った。
さすがに全財産が入っているのだ。いくら重くても人にゆだねるのは論外だった。
荷物が多いからと運動靴にしたのは幸いだった。
香子はそのまま森の中を1時間近く歩かされた。

村のようなところに着いた時には、香子は情けなくもその場にへたりこんだ。
男たちが苦笑しているのがわかる。けれど香子は疲れていた。
わからない言葉、自分のペースでない歩み、そしてこの先のこと。
茅葺屋根を被せた小さい家々から人々が顔を覗かせている。そのうちの女性が一人おそるおそるという体で近寄ってきた。
『○×△？』
『○△』
彼女も粗末な布で作ったような着物を着ていた。そして男たちに何事か話すと、へたりこんでいる香子に手を差し伸べた。
『ありがとう』
そう言ってへらりと笑い立ち上がると、女性は笑った。
『ステキな、色の、髪してる』

ゆっくりとなまりを含んだ標準語で話しかけられ、香子は首を傾げた。そして自分の髪を軽く掴む。
そして納得した。
香子の髪は中国にいる間中ずっと赤に染めていたのだ。大学時代しか髪の色も自由にできないからと、ただひたすらに赤に染めていたのだった。香子の髪は胸につくぐらい長く、それをずっと赤に染めていた為非常に目立つ。染め続けていたせいか髪にはしっかり色が馴染んでおり、元からこのワインレッドの色だと言われても違和感がないぐらいになっていた。
『ありがとう』
『それ本物？　偽物？』
『偽物です』
そう言って笑うと女性もまた笑った。
『よかった』
女性は安心したように言うと、香子を家に招き入れた。
粗末な木の椅子とテーブルがあり、香子は座るよう促された。
『本当の色は？　黒？』
そう聞かれて香子は首を傾げた。何の話だろう。
『髪』
と指差して言われ合点がいった。
『黒です』
（やけにこだわるな……）
どうもこの辺で様子がおかしいことに香子は気づいた。
『お湯どうぞ』
『ありがとう』
お茶を飲む習慣がないのだろうか。それともお茶を買えないほど貧しいのか。それでもここが中国だというなら煮沸したものが出てきただけありがたいとも香子は思う。
湯のみに入っているお湯は濁っていた。けれど香子はためらわず口をつけた。

少し重いかんじがするがへんな味はしない。思ったより喉が渇いていた。
そうしてすすっていると、小屋の表が不意に騒がしくなった。
聞きなれない音と聞きなれた音が混在している。香子は耳を澄ました。
女性は『ちょっと待ってて』と香子に声をかけて立ち上がった。
入口まで歩いていった時入口にかかっていた布が払われた。
『わぁ……』
思わず香子は声を上げた。
入ってきたのはいかにも中国古代の文官服を着た秀麗な男性だった。

3．やっぱり異世界なんですか？

男性は香子を見ると一瞬はっとしたような顔をした。しかしすぐにその表情を柔和なものに戻す。

『あの方ですか？』

『はい』

男性は女性に声をかけた。どうやら用があるのはやはり香子に、らしい。

表情は柔和だがその目は非常に鋭い。けれど彼はゆったりとした動きで香子の側に立つと、

『初めまして、私（わたくし）は趙文英と申します。異なる世界からいらした同胞にお会いできて光栄です。是非私と共にいらしてはいただけないでしょうか』

と優雅にとんでもないことをのたまった。

香子の脳裏をいろんなものが駆け巡る。

（『異なる世界からいらした同胞』って今この人言った？　これは聞き間違いに違いない！）

趙と名乗った秀麗な男性はとてもきれいな中国語を話した。いわゆる『北京官話』と呼ばれる中国華北地方から東北地方に通用する標準語の発音である。現代中国語はこの『北京官話』を基礎に標準語と定めているが、ここでもそうなのだろうか。

『すいません、先ほどあなたが言った『異なる世界』とはどういう意味でしょうか？』

とりあえず香子は聞いてみることにした。

なんだかとても嫌な予感がする。

『そのままの意味です。貴女は異なる世界から我が世界の神によって召喚されてきたのです』

（……は？）

涼しげな表が言ったその科白は、香子を固まらせるには十分だっ

た。
その間も香子の頭の中でぐるぐるといろんな考えが浮かぶ。
（これは平行世界？　それとも俗にいう異世界トリップ？　しかも召喚されたとかって何ーーーー！？）
考えるだけで頭がくらくらしてくる。そうでなくても慣れない道を1時間も歩かせられて疲れている。
実際のところ今までは考えないようにしてきたのだ。それなのにこの趙という秀麗な男性はあっさりととんでもないことを告げた。
香子が脂汗を流しながら沈黙していると、再び趙が口を開いた。
『失礼ですが、その髪の色は元からのものでしょうか？』
『染めています』
即返答すると趙はほっとしたように笑んだ。
『元の髪色は黒、でしょうか？』
『はい』
香子は首を傾げた。そんなに黒であることが大事なのだろうか。
そういえば、と思い出す。
（『同胞』って言われたような……？）
香子は趙と同じ言葉を話している。つまり異なる世界からではあってもルーツは同じ者、つまり中国人と思われているのだろう。おそらく何か手違いがあって香子が召喚されてきたのだろうが、ここで日本人だというのはためらわれた。
（へたすると殺されるかもしれないし……）
それぐらいは混乱した頭でも思いつく最悪のシナリオである。
『あの、私特別な能力とかないですけどどうして召喚されたのでしょうか？』
そう聞くと趙の顔が一瞬陰った気がする。
『私にはわかりかねます。ですが召喚された方は王城へお招きすることになっております。是非私と共にいらしてください』
丁寧に拱手する。
（答えてくれる気はなさそう……）

きっと趙は召喚の理由を知っている。
（生贄とかだったらやだなぁ……）
『ええと、この国の名前はなんというのですか？』
気になったことをとりあえず教えてもらうことにする。
『唐です。貴女様がいらした国名はなんというのですか？』
（唐……）
『現在は中華人民共和国と言います。略称は中国です』
『随分長い国名ですね』
『はい。長い歴史の中には唐という国名もありました』
そうついでで香子が答えると趙は笑んだ。
『お名前をお聞かせ願えますか？』
そう聞かれてやっと香子は名乗っていなかったことに気づいた。
本名を名乗ろうとして考える。
（中国人の名前が４文字ってことはまずないよね）
新たに名前を考えるのも面倒なので名前を短くすることにした。
『白香といいます』
香子の本名は白沢香子というが、中国では一般的に姓は１文字、名は時代によって１文字であったり２文字であったりする。姓名合わせて４文字というのはまずない。
『それでは白香様、参りましょう』
趙に促されて席を立つ。香子は行くともなんとも答えてはいないが、ここでごねてもどうにもならないことはわかっていた。
（なるようになる……）
そんなことを考えてそっと香子は嘆息した。

3．やっぱり異世界なんですか？（後書き）

今回の更新はここまでです。
あらすじが消化できなくてすいません。

4．異世界確定です（前書き）

『』内の言葉は主に中国語です。

4．異世界確定です

この国に関する基礎知識は移動中に教えてもらうことにして香子は促されるままに馬車に乗った。

出発する時村の人たちが馬車に向かって拝むようにしていたのが香子としては引っ掛かる。きっと向かいに座っている趙文英に対してなのだろうが、そうでない場合とても嫌な予感がした。

趙は秀麗な表ににこやかな笑みをたたえて香子を見ていた。

『あのぅ……王城というか王都にはどれぐらいかかるのでしょうか？』

輿とかではなくて助かったが、道がアスファルトで舗装されているわけではないのでかなり揺れる。しかも急いでいるのかかなりのスピードを出しているようだった。

『できるだけ早くお連れするように言われていますので、夜は宿に泊るとして2日と半日ぐらいというところでしょうか』

（2日半……）

香子は頭がくらくらした。一応街道ではあるからならされてはいるが所詮土の道である。それこそ中国に初めて着いた年に車に乗った時と同じぐらい馬車は揺れる。

（車酔いするんだよね……）

一応言っておいた方がいいかもしれない。酔い止めの薬とかはないだろうが少しは気を使ってくれる、と思いたい。

『すいません、一応車酔いする性質だということは伝えておきます』

そう告げると趙は心配そうな表情をした。

『かしこまりました。気分が悪くなるようでしたらいつでもおっしゃってください』

香子は眉根を寄せた。初対面の人にそんな親切にされる理由が思いつかない。

しかも相手は明らかに官吏で、香子は言ってしまえばただの平民

だ。香子は別段目立った容姿をしているわけでもないしもちろん特別な能力があるわけではない。中国語が話せることが特別といえばそうかもしれないが４年も留学したのだからある程度習得していて当然ともいえる。

だからと言ってどういうことなのか聞いても趙は答えてくれないだろう。仕方なく香子は当たり障りのない質問をしていくことにした。

香子が倒れていた場所は石家荘という街の外れにある神殿だったらしい。現在の王都は北京にあり、遷都をくり返して北京に決まったということだった。

唐の都は長安ではないのかと香子が聞くとひどく驚かれた。最初の頃は確かに長安が都であったらしい。

異世界というよりやっぱり平行世界なのではないかと香子は思ったが、残念ながらこの国の周辺には日本も朝鮮も韓国もその他もろもろのアジア諸国が存在していなかった。

（中国は１４か国と隣接していたのに……）

この国も聞いているとかなりの広さがありそうである。そしてこの国が存在している大陸には全部で５カ国しかないと言う。その中でも一番力を持つのがこの国なのだと趙は誇らしげに語った。

もちろんこの世界には他にも大陸がいくつも存在し、一番近い大陸までは船で３カ月かかると言う。

スケールの大きさに香子はやっぱり頭がくらくらした。

『白香様は博学でいらっしゃるのですね』

現在の中国の歴史や政治・経済・貿易の状況などを聞かれるままに答えていたら趙はそんなことを言った。

『私は大学生でした。これぐらいは知っていて当然です』

そう答えながらちょっと香子は後ろめたいものを感じる。実をいうと中国のことばかり詳しくて母国である日本のことはほとんど知らないのだ。地理も歴史も中国のことばかり詳しく、日本の古典も

読めないし歴史も地理もからっきしである。
（うわぁ、とんだ非国民だわ、私……）
中国人と思われているのも微妙ではあるが全く疑われもしないのもまた複雑だ。

移動は明るいうちに行い、日が陰ると居心地のいい宿に泊まった。しかも何人も手伝いと称して侍女が着き、上にも下にもおかない扱いである。
（巫女とか、人柱とかだったら嫌だなぁ……）
食事は肉類は少なく野菜がメインがあったが食べやすくおいしかったし、風呂といえば大きな盥にお湯を張って世話をされる。趙は優男という風情だが実は石家荘の長官の副官であるとも聞いた。副官は雑務だけでなく護衛も兼ねているいわゆるなんでも屋のようなものだと趙は言っていたが、そんな簡単に説明できるものではないことぐらい香子にだってわかる。
（嫌な予感が当たりませんよーに）
翌日は王都に着くという夜寝台に横になって香子は願った。

４．異世界確定です（後書き）

ちょっと豆知識

唐：６１８－９０７　都は長安

中国と隣接する国：朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）、ロシア、モンゴル、カザフスタン、キルギス、タジキスタン、アフガニスタン、パキスタン、インド、ネパール、ブータン、ミャンマー、ラオス、ベトナムの１４か国

5．王都に着きました（前書き）

『』内の言葉は主に中国語です。

5．王都に着きました

翌朝早くに一行は宿を出発した。予定では夕方になる前に王城に着くらしい。

『お疲れのところたいへん恐縮ですが、これからの予定をお伝えしておきます』

そう前置きして趙は淡々とスケジュールを語った。

昼食は王都の飯館（レストラン）で取り、その後召喚された時と同じ服を身に着ける。

王城に着いたらまず皇帝に目通りする。いくつか質問されることがあるかもしれないが答えられる範囲で答えればいい。部屋に案内され着替えた後、晩餐会に出席する。

聞いているだけで香子は頭が痛くなった。

（長い一日になりそう……）

『晩餐会にはこの国の守護四神がいらっしゃいます。白香様とお言葉を交わされることとなるでしょう。とても美しい方々ですができるだけ心安らかにお過ごしくださいますよう』

（四神？）

聞き慣れない単語に香子は首を傾げた。

『四神ってなんですか？』

自分に全く関わらないものならいいが話をすると言われている。知らないままでいていいはずはないだろう。

『四神はこの国の守護をされている神様です。東を青龍様、南を朱雀様、西を白虎様、北を玄武様が治めていらっしゃいます』

（……は……？）

香子の頭の中で龍と赤い鳥、白い虎、亀が廻った。

（なんで神様と会話なんか……）

とても嫌な予感に脂汗が背中を流れた。

『あのぅ……神様と言葉を交わすなんてそんな恐れおおいことを私

がしてどうするんですか……？』
正確には自分がどうなるのかすごく聞きたい。趙はにっこりした。
『それはお会いすればおのずとわかることでございます。詳細は私にもわかりかねます』
（嘘だーーーーーーー！！　絶対この人私がどうなるか知ってるーーーーー！！）
香子は叫びたかった。
今すぐこの馬車から下りて逃げ出したい。けれど自分の荷物は手元になく、香子にできるのは会話ぐらいのもの。そしてこの赤く長い髪は目立つ。
（やっぱり帰る前に黒に染め替えるんだったーーーー！）
せっかくの赤い髪、せめてぎりぎりまで付き合っていたいと思ったのは間違いだったのか。
香子は暗澹たる気持ちになった。

もちろん逃げるなんてことができるはずもない。何事かで少し停車した後再び走り出した馬車は、いきなり揺れが少なくなった。
「？」
疑問が顔に出ていたのか趙が説明してくれた。
『王都に入りました。王都は石畳ですから揺れは少ないですね』
とうとう王都である北京に着いたらしい。
（こういうのとんぼ返りっていうのかしら）
『表を見ても？』
『どうぞ』
香子は趙の言葉に甘えて馬車の窓にかかる布を払った。馬車のそばには護衛と思しき人たちが馬に乗ってついている。
下を見るとなるほど白っぽい石畳だった。そのまま視線を空に向ける。
（あー、きれいだなー……）
香子がいた北京の空は白っぽかった。発展途上国という名にふさ

わしく、ちょうど経済成長期で中国中が大気を汚染する物質を撒き散らしていた。
けれどこの国にはそういう有害なものはないらしい。ところどころ雲が浮かんでいる空はどこまでも青く澄んでいた。
自分の故郷である東京もここまできれいな空はしていない。
（ああ本当に……）
香子はやっと実感する。
（ここは私の知っている場所ではないんだ……）
一度旅行に行った内モンゴルの空もきれいだった。日本だって北海道とかそういうところへ行けばきれいなのだろう。
いつまでも上を見上げている香子を不審に思ったのか護衛の一人が声をかけてきた。
『なにか気になることでも？』
『いいえ、何も……』
香子は布を戻し馬車の中に頭を引っ込めた。
『何か面白いものは見れましたか？』
趙の優しい声音がつらい。香子は泣きそうになるのをどうにかこらえた。
『空が……とてもきれいだったんです……』
ただ、それだけ。
そう、ただそれだけのこと。
『そうですか』
けれど趙は何も聞かないでくれた。
しばらく香子はそのままぼうっとしていた。
やがて昼食を摂る予定の飯館に着いたらしい。
『お食事は召し上がられますか？』
趙の優しい声に香子は素直に頷いた。
沈んでいても何をしていても腹が減っては戦はできぬ。そうでなくてもこれからがたいへんなのだから食べられる時に食べなくては。
香子は趙に促されるままに飯館に入っていった。

6．王城に着いたようです（前書き）

『』内の言葉は主に中国語です。

6．王城に着いたようです

王都の飯館（レストラン）というだけあって今まで食べたものよりもあかぬけていた。

お皿もぴかぴかに磨かれているし、料理と共にお皿に乗っている飾りも見事だ。もちろん店内も広く清潔でさすが王都の飯館と言いたくなる。

給仕のタイミングもばっちりで、何故かメニュー表も香子に渡された。

正直香子は学生だったのであまりこういう豪華な店には縁がなかった。その為メニュー表を見せられても大体字面でこういう料理なのかなと想像するだけで全体が掴めない。ここはやはり趙文英に頼むべきだろうと香子はメニュー表を趙に渡した。

『お気に召しませんでしたか？』

と聞かれて違うと答える。

『私は学生だったのでこんな高級そうな店で食事をしたことがありません。メニューを見ても料理の想像がつかないのでおまかせします』

そう言うと趙はにっこりした。

『嫌いな物はありますか？』

『肉の塊や内臓の類は苦手です。できれば野菜、鶏、魚介類で選んでいただけると助かります』

『かしこまりました』

そうやって選んでもらった料理はおいしかった。お茶は高級な店らしく菊花茶だったのが少々残念なぐらいである。

驚いたことに通された個室には着替えの為の小さな部屋までついていた。食べ終えた後そこで元の服に着替える。得体のしれない服だろうに丁寧に洗濯までされていた。

長袖のTシャツにジーンズ。そういえばセーターやオーバーは飛

行機の中で脱いでしまったのだ。けれどそれだけの格好なのに寒くはない。
（私が帰国した時は冬だったんだけど……？）
『今更なのですが、現在の季節って……？』
『春です。その格好ではいささか寒くございませんか？』
『いえ、今のところは大丈夫です』
冬から春に移動？　香子は頭を悩ませながらも再び促されるまま馬車に乗った。

王城に着く前にできるだけいろんなことを聞こうと思っていたが、朝早かったこともあって疲れていたらしい。香子はすぐにうとうとと眠ってしまった。
『……白香様、白香様』
何度も声をかけられてやっと香子の意識は浮上した。目を開けて辺りを見回すと随分と暗くなっている。いつのまにか自分が眠っていたことに気づき、香子はばっと体を起こした。
『あの、すいませんでした……』
趙に謝るととんでもないと微笑まれる。
『移動で疲れていらっしゃるのですから起こすのが申し訳ないぐらいです。ですがそろそろ王城に着きますので』
そう言われてとうとうか、と香子はそっとため息をついた。泣いても笑ってもここで自分の運命がわかるはずである。
そうしているうちに馬車が何度か止まり、そろそろ着いたのかなと思ったところで『着きました』と趙に促された。
馬車の扉が外側から開かれ、趙に手を取られて馬車を下りようとした時、目の前にいかにも官吏という格好をした人々が平伏していた。
（な、何ーーーーー？）
『異世界からこられました客人にご挨拶に参りました。どうぞこちらへ』

その中でも位の高そうな格好をしたおじさんに促される。
『あ、あのぅ……』
（これは一体なんのびっくりカメラですか……？）
趙を見ると軽く頷いた。どうやらこのおじさんに着いて行った方がいいらしい。
おじさんの後を着いて行くとその後に趙、それから先ほど待っていたらしい人々が着いてくる気配を感じた。慣れないことに香子は背中をだらだらと冷汗が流れるのを感じた。
広い石畳を歩き、白い石で造られた長い階段を上り、その先にあるのが謁見室らしかった。
（紫禁城と造りは似てるけどどうなんだろう？）
現実逃避がしたくてどうでもいいことをつい香子は考えてしまう。
再び階段を上り広い室内に足を踏み入れると、沢山の人が香子に目を向けた。
（……うっ……）
おそらく見世物パンダになる予感はしていたがこんなに注目を浴びたのは初めてである。香子がひるみそうになっている間もおじさんはどんどん足を進め、おそらく玉座だろうと思う場所から１０メートルぐらい離れた場所で足を止めた。
『皇帝陛下がまもなくいらっしゃいます。それまでしばらくお待ちください』
そう言って脇に避け、香子は後ろに控えている趙と真ん中の位置で取り残された。
（この場合ただ突っ立ってればいいわけ……？）
いくらなんでもここで座り込むわけにはいかないだろう。そんなことを考えていると、
『皇帝陛下のおなーりー！』
と銅鑼の音と共に朗々とした声が室内に響いた。

6．王城に着いたようです（後書き）

今日中にあらすじの場面まで書けたらいいと思ってます。。。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4786ba/

異世界で四神と結婚しろと言われました

2012年1月14日17時53分発行